



## 春の紋別岳

苫小牧市医師会 橋本 洋一  
苫小牧東病院

ゴールデンウィークの最終日、5月7日が平成18年最初の登山日で、目指すは紋別岳。紋別岳というと北見紋別あたりにある山と思っていたが、この山以外には伊達市街地の東側に位置する山にも同じ紋別岳の名が付けられている。紋別という地名の由来はアイヌ語の『モペツ』(流れの緩やかな静かな川)らしい。しかし、それらしい川が周囲に見当たらないのはどう考えたらいいのだろう。この山は地球上に人類が誕生する以前の180万年から200万年前にできたらしいが、アイヌの人たちが活動していた時期あるいはそれ以前に『モペツ』はあったのだろうか？

支笏湖温泉から札幌方面に引き返すこと約500メートルの地点で小道を右折するとすぐに登山口ですでに数台の車が止まっていた。予定より30分ほど遅れた8時40分登山開始。この山の頂上には無線中継所とアンテナがあり、NTTの管理道路が登山道になっていて登山をした気持ちになれないという理由で今まで見送ってきた経緯があったが、登ってまもなく短縮道路の存在に気づいて登山者4名の総意で短縮道路を登ることに決定した。今年初めての登山で自然に対するこの上ない思いが躊躇なくそういった決断を下すことになったのだろう。雲ひとつない快晴に恵まれた中を急斜面に若干の不安をのぞかせながら

登り始めた。約50メートル先に2人の登山者が目に入った。もくもくと登っていく姿に負けじと思うものの、その距離はなかなか縮まらない。ほとんど風もなく、見下ろした支笏湖の湖面も静かな佇まいで、さらに登ると支笏湖の反対側の正面に風不死岳が、その左隣に7合目あたりから雪化粧した樽前山(平成12年初夏、本格的な(?)登山を始めたが、その最初の記念すべき山)が、そして90度以上右側には昨年夏に登った恵庭岳が、風不死岳のやや右側の奥のほうには3年前に登ったホロホロ山と徳舜別山が並んで眺められた。

残雪が所々にみられ、勾配がやや急なため(たぶん30度くらいはあるだろう)アイゼンを持ってこなかったのが悔やまれたが、頂上に辿り着いたのが予定より遅れること30分の10時40分。休む時間を多く取ったためであったが、支笏湖とその対極にある山々の風景が刻々と変化し、足が釘付けにされた。頂上に置かれた『紋別岳(865m)』の木製プレートがこじんまりしていて逆に印象的であった。

ギョウジャニンニクを添えた松尾ジンギスカンにエビスビールとシャブリ・プルミエクリューのフルジョームを少し早い昼食として満喫した。少し睡眠を取って、午後12時10分に下山開始し、最初は登ってきた短縮路を下り、途中から雪に覆われた本来のNTT管理道路を下った。勾配が緩やかなためか、1回も休むことなく登山口に約1時間後の午後1時10分に到着した。登山を満喫できる(?)短縮路と本来の登山道を織り交ぜて登るのも一興かもしれない。3万2千年の歴史を有する支笏湖、そしてその湖を取り巻く山々のパノラマをさまざまの角度で眺めるのも魅力のある登山といえるだろう。

まだ登ったことのない風不死岳の登山を今から楽しみにしている。



# 七夕祭り

小樽市医師会 本間 勉  
野口病院

## 1. はじめに

来る七月七日は「七夕祭り」である（北海道は八月七日で私の誕生日である）。

五大節句のひとつであり、この日は“お盆入り”の前ぶれでもあるので先祖の霊に感謝してお墓や仏壇を清掃する地方もあったという。

「七夕祭り」の由来は中国の周時代に“星は人間の運命を支配する”という説（東洋的思想）が台頭し忽ち拡大隆盛を果した。（星占も盛んに流行した）。

## 2. 七夕の悲恋物語（伝説）

ちょうどこの頃作者不明の二つの星の悲恋物語が生れて世界に広まった。この物語？ というのは、天の川の東に居た天帝の娘「織姫星」が天の川の西に居る「牽牛星」と恋仲になり、夢中になって彼女は仕事の機織も手につかず止めてしまったので天帝は激しく怒って罰として二人の逢う瀬を年に一度だけの七月七日夕べに限ると決めた。という簡単なものである。しかし、天文学的にいうとこの夜が両星が一年に一度だけ急激に近づき特別輝く日なのだという。この物語は天文学者の作と思われるし、この二つの星が目立って美しく輝くので選んだのであろう。

## 3. 物語の二つの星

### ・牽牛星（アルタイルという）

→鷲座の一等星（一番明るい星）で直径太陽の1.7倍で太陽の100倍の早さで自転している。地球から16光年（光が1年で届く距離）で天の川に近づくのは大変である。

### ・織姫星（ベガという）

→琴座の一等星で牽牛よりはるかに小さいが25光年も地球から離れているので大きさは不詳（調査中）。彼女も余りにも遠いので天の川に

近づくのは大変と思う。

四年前スバル望遠鏡（日本製でハワイの山頂に設置した世界一のもの）が織姫星が五ツ児星を連れて天の川近くに七夕の日に現れた（大発見）というので世界中をアッ!!と云わせた。

## 4. 七夕の命名

古くは「星祭り」「銀河祭り」「機織祭り」等といていたが、④月七日④物語が出てから「七夕」というようになった。その真意は謎多し。

## 5. 七夕の日本への伝来

天平6年（734年）1260年前聖武天皇代に中国（あるいは韓国方面）より伝えられたらしい、天皇は早速宮中で「七夕祭り」として男女文人の上達を願って心を込めた詩歌を書かせた（万葉集にも多数掲載されている）。また、男性の若者には健康向上の為相撲大会を賑やかにやらせたという。

これが日本の七夕の始めとされている。

## 6. 「乞巧奠」とは

宮中の女官達が機織り・裁縫・習字等の手芸上達を祈願する行事で七夕の日に加えられた。

## 7. 「七夕流し」

古くは七夕の夜は庭に香を焚き、五色の針・糸を供え、麥・ソーメンを供え、芋の葉の露で墨をすって、五色の短冊に願いを込めて詩歌を書いて笹竹に下げて五穀豊穰・技能上達・好縁等を祈願し、翌朝川や海に流す行事があった。

## 8. 「人形流し」

平安時代から室町時代には朝廷のみならず貴族・武家・豪商等の年中行事となり地方色豊かな七夕が行われ、江戸時代になると広く一般の人々にも普及して益々盛大な国を挙げての行事になった。

中でも人形に紙の着物をきせて色々の願い事を書いて人形と共に踊り歩いて翌日川に流す行事（人形流し）。

## 9. 近年の七夕

最近七夕祭りをする所は稀少価値で、関東の平塚・小田原と東北の仙台（図1）・青森のねぶたのように町中を挙げて盛大に実施する所は少なく“観光要素”が多く仙台の商店街（図2）の賑いを見れば一目瞭然で



七夕祭り (仙台市)

図1



繁華街のマーケット

図2



図3

ある。

昔のように庭に笹竹を飾る家庭(図3)も稀に見つけると懐しさと同時に淋しさと胸が一杯になる。

10. 私たちが子どもの頃(昭和13~14年頃まで)は小樽も港街だけあって七夕祭りは町中を挙げて盛大でした。大小の行燈やカンテラを子どもが持って「七夕祭りよ、ローソク出せ出せよ、出さねばカッチャクゾ、おまけにクツクゾ」等と叫びながら町内を廻ったことを思い出す。

親も子どものために行燈造りやカンテラ作りに一生懸命でしたし、玄関に提灯をさげない家ありませんでした。

現代は昔の懐しい楽しい行事が次々に消えて情緒が薄らぐのは残念でたまりません。何時の日か昔へ復古する楽しい行事があればと切望する次第である。

